

P-5 当院の救命救急センターにおける 高気圧酸素療法の適応についての 検討

不動寺純明 葛西 猛 三沢尚宏 葛西嘉亮
金子 晋 郡 太郎 大橋正樹 稲葉 彰
(亀田総合病院 救命救急センター)

【目的】救命救急センターにおける高気圧酸素療法の適応およびその治療効果を検討した。

【方法】これまでに当院の救命救急センターで行った高気圧酸素療法は29症例あり、これらの診断および治療効果についてretrospectiveに検討した。治療効果については客観的な判断基準がなく主治医の主観的意見にて判断した。

【結果】適応疾患は一酸化炭素中毒12例、脳神経疾患(低酸素脳症、脳挫傷、びまん性軸索損傷、意識障害)7例、感染症(ガス壊疽、壊死性筋膜炎)4例、腸閉塞3例、潜函病3例の29症例であった。一酸化炭素中毒、潜函病は一回のみの施行が多くすべての症例で遂行できた。他の症例は3-7回の予定であったが途中で中止したものもあった。中止の理由は耳痛、気分不快がもっとも多かった。一酸化炭素中毒、潜函病についてはすべての症例に改善を認めた。腸閉塞については痛みが少ないが繰り返すものを適応としたため多くは改善したが高気圧酸素療法単独による効果の判定は困難であった。感染症に対しても抗生剤治療、手術療法も併せて行ったため高気圧酸素療法単独の効果は評価困難であるが感染症はうまくコントロールされた。脳神経疾患については他に治療法が少ないことから高気圧酸素療法を行うことが多くなったが一時的な改善例はあるものの著効したものはなかった。

【結論】救急の場における高気圧酸素療法は一酸化炭素中毒、潜函病、ガス壊疽などの嫌気性菌による感染症に対して有効であった。脳神経疾患に対する高気圧酸素療法は細かい治療効果判定基準を作り今後されに評価すべきである。

P-6 一酸化炭素中毒患者大量発生時の 緊急対応ネットワーク構想

鹿野 恒¹⁾ 上村修二¹⁾ 小出 亨¹⁾ 奈良 理¹⁾
森 和久²⁾ 伊藤 靖²⁾ 松原 泉²⁾ 浅井康文²⁾
(¹⁾ 札幌医科大学救命救急センター)
(²⁾ 市立札幌病院救命救急センター)

近年、各種災害に対する救急医療体制の整備が全国で進められている。その中で一酸化炭素中毒患者の大量発生は、ガス漏れ、火災、爆発などを契機に比較的発生頻度の高い災害である。一般的に高濃度の一酸化炭素中毒では緊急の高気圧酸素療法(以下HBO)が必要であるが、災害時には救命救急センターを中心とする第3次医療機関に患者が集中し、またHBO装置にも制限があるため、治療開始までにかかり時間がかかっているのが現状である。

【目的】札幌市内のHBO保有施設と緊急災害時の受け入れ体制を調査し、また医師派遣による現場でのトリアージ、救急隊搬送体制を整備し、事故発生1時間以内にHBOを含めた医療を提供できるように、緊急対応ネットワークを整備しシミュレーションを行なった。

【結果】札幌市内には32施設で合計58台のHBO装置があり、その中で夜間・日祭日を含む緊急対応可能な施設は16施設で一種38台、二種1台、計42名の一期的治療が可能であった。またどの施設においても要請60分以内のHBO稼働が可能であった。

【シミュレーション】119番通報の後、指令情報センターでは直ちに市内2ヶ所の第3次救急医療機関に医師臨場要請を行ない、同時に災害規模・地域性に基づき緊急対応医療機関の受け入れ状況を確認し、臨場医師のトリアージに基づき患者搬送を行なった。ここで原則としてピストン輸送は極力避け、またHBO装置1台に対して1名の患者搬送を行なうものとした。

【まとめ】札幌市内にはHBO施設が比較的豊富であり、多数の一酸化炭素中毒患者の一期的治療が可能であった。したがって市内だけでなく、近隣都市における一酸化炭素災害に対応するために、今後の検討が必要と考えられた。